

第 35 期第 9 回研究会「視覚メディアのモード変化とその社会文化的影響を考える」

(メディア文化研究会企画) 終わる

日 時：2016 年 10 月 15 日 (土) 14:00~17:00

会 場：関西大学梅田キャンパス (KANDAI MeRISE) 6 階 601 教室

報告者：酒井健宏 (名古屋シネマテーク)

討論者：西山哲郎 (関西大学)

司会者：岡井崇之 (奈良県立大学)

参加者：14 名

記録執筆者：岡井崇之

本研究会は、司会の岡井崇之、討論者の西山哲郎会員、参加者の谷本奈穂会員らを中心として継続して行ってきた「身体×文化×メディア」研究プロジェクトの研究成果をもとにしている (これらの成果は、西山哲郎・岡井崇之・谷本奈穂編著『メディアとボディ・イメージ』(風塵社)として近く出版予定)。かつて、技術決定論としてメディア・テクノロジーが軽視される傾向もあったが、近年、テクノロジーに力点をおいて現在のメディア環境をとらえなおそうとする研究が立ち現われている。

本研究会も、テクノロジーにもとづく写真、映画におけるイメージの創出を踏まえ、デジタルサイネージ (電子広告媒体) やスマートフォン、電車内のモニターなど、画像データが遍在する現在のメディア環境について検討しようというものであることがまず確認された。また、その際、テクノロジーとイメージの生産過程における複雑な様態に注目することが強調された。

報告者の酒井健宏氏は、「多層化する視覚メディアと身体——写真はいかに身体を動かしてきたのか」と題して報告を行った。酒井氏の発表は、研究者であると同時に映画制作者でもある立場から、視覚メディアの技術革新とそれが構成する「現実」の変化に関する最新の知見を提供することを意図したものであったが、まず前提を共有する目的で、そもそも画像が遍在する映像環境において「写真」とは何を意味しているのかという問いかけに始まり、映像の歴史とその特徴について詳しい説明がなされた。

酒井氏は、写真機が何であるかよりも、静止画イメージの加工のプロセスが重要性を持つという。イメージの加工を「元の現実」のアウラの回復や補填の過程としてとらえ、その歴史を振り返ると、編集や合成の工程におけるモードやスタイルは次の三つに分類できるという。それはすなわち、①静止画としての写真、というより、その集積としての映画を含めたフィルム画像と、②地上波テレビ放送をモデルとするアナログ電子画像、そして、③インターネットのデータ通信をモデルとするデジタル電子画像である。動画の生成と加工に見られる三つの支配的モードは、それぞれに特有の動画表現を生み出してきた。第一のモードでは、基本的に静止画であるフィルム画像から「現実」を構成するために、かえってリニアな物語性を表現するための技法が発達した。第二のモードでは、電子ビームで

描画されるアナログ電子映像が通時的に構成される性質をもつために、かえってスーパーインポーズのような割り込みカット編集の技法が発達した。第三のモードでは、デジタルな情報構成の特色から静止画と動画の差異は限りなく小さくなり、映画産業の黎明期のような実験的な編集手法が日常的なものになってきている。そこでは物語性よりも、断片的な映像データの交錯が聴視者の身体を直接的に刺激することが意図されていると考えられる。いまや視覚イメージは、静止画であれ動画であれ、重層的な画像データの（通時的とも共時的とも言いがたい）同時進行的な併存によって構成されている。

第一のモードの特徴はその非自己完結性にある。初期映画は物語性が極めて低いため、人々は補って見る必要があった。その非自己完結性は、連続していないものを想像してつなげることを人々に要求する。身体との関係において考えたとき、映像が観客の身体感覚に働きかけ、揺さぶるのだという。その後の古典映画は物語への没入を強いてきた。では、現代の動画文化は初期のノンリニアに戻っているのかという疑問点が生じる。つまり、オーディエンスの身体を解放していくのかということであるが、これに対して、討論者の西山会員から、カメラ、映像は規律・監視の手段でもあるという指摘が行われ、オーディエンスの主体性の復権なのか、身体管理の強化なのかを問う必要性があることが述べられた。酒井氏は、CMやミュージックビデオにおける身体イメージを例に、表象される身体の断片化とオーディエンスの身体の解放という二つの次元を指摘した。きやりーぱみゅぱみゅの身体表象の分析などから導かれるのは、別のものと入れ替え可能な身体や、物語性を消失させた動物的・生理的な身体のあり方である。

西山会員は、自身による映画『リング』に関する論考（西山 2002）をもとに映像と身体の関係について論点を提示した。なぜ「貞子」が恐怖されるのかについて、貞子の身体的な特徴ではなく、境界を越えられる怖さ、言い換えれば通常の映像と観客の関係を攪乱することにその要因があるという。異空間をつなげることが恐怖という身体的な反応を喚起する例といえる。この作品がアナログなビデオテープをモチーフにしている点に注目し、静止画と動画のメディア的特性についてさらなる研究が必要であると指摘した。

石田佐恵子会員からは、酒井氏の報告に対し、映画、テレビ、ネットの三つをつなげる視点が新鮮であるが、何を介してどこで見るのかという視聴空間への注目が重要ではないかという提起が行われた。その他にも、参加者から多数の質問があげられ、活発な議論が行われた。なお、この会は谷本ゼミ（関西大学）との共催で行われたため大学院生や学部生も参加し、映像制作や表現技法に関する質疑も活発に行われた。